

(10月 30日)「詩編 119 : 65~72」

彼らの心は脂肪に閉ざされています。わたしはあなたの律法を楽しみとします。

(詩編 119 編 70 節)

・わたしたちは牛肉を食べるときに、「霜降りが美味しいわぁ」と言います。アメリカなどでは逆で、赤身の堅い肉が好まれるようです。ところで聖書の中では、脂肪は口にはしてはいけないとされていました。

・たとえば献げ物の規定が多く書かれているレビ記 4 章 19 節にはこうあります。「脂肪はすべて切り取って、祭壇で燃やして煙にする」と。脂肪は体の中で余分なものなので、神さまに献げなさいということでしょうか。

・「彼らの心は脂肪に閉ざされています (70 節)」とありますが、その脂肪とは、わたしたちの心にある悪い部分のようにも思えます。プライドや虚栄心が心を閉ざすこともあると思います。それを神さまに献げ、燃やしてもらうのです。

(10月 31日)「詩編 119 : 73~80」

あなたを畏れる人、あなたの定めを知る人が わたしのもとに立ち帰りますように。

(詩編 119 編 79 節)

・ようやく 10 番目の文字、「ヨド」に入りました。この詩編 119 編は最初を書いた通り、教育的な目的で書かれたものです。ヘブライ語の 22 文字をそれぞれ頭文字とする単語を最初に使い、読んでいるうちにアルファベットを覚える仕組みになっています。

・また内容も、教育的だと言えるでしょう。77 節の「御憐れみがわたしに届き 命を得させてくださいますように。あなたの律法はわたしの楽しみです」という言葉を、生徒は何度も繰り返したのでしょうか。

・教会にも、年間聖句というものがあります。また幼稚園などでは、今月の聖書の言葉を暗唱します。そのようにみ言葉に触れ、何度も唱えることで自分の心に刻み込む。そしてその中から「愛唱聖句」を作っていきます。

2025 年 10 月

詩 編 通 読

10 月



(10月 1日)「詩編 109 : 1~5」

神に逆らう者の口が 欺いて語る口が、わたしに向かって開き 偽りを言う舌がわたしに語りかけます。

(詩編 109 編 2 節)

・「敵に呪われた義人の祈り」：救いを求める祈りです。わたしたちは生きていく中で、理解することができないようなひどい攻撃を受けることがあります。特に SNS が発達した現代においては、匿名で簡単に自分の意見を発信することができるようになりました。

・悪意があろうとなかろうと、時にそれらの言葉はわたしたちの心を突き刺します。そして今日の言葉にあるように、「愛しても敵意を返し わたしが祈りをささげても その善意に対して悪意を返します。愛しても、憎みます」となるのです。

・そのようなときに、わたしたちはどのような行動を起こすのでしょうか。この詩編の中で作者は、攻撃をしてくる人を呪ってしまいます。その行為は決して良いものではありません。しかしその状況を想像すると、その気持ちも分かる気がします。

(10月 2日)「詩編 109 : 6~19」

彼は呪うことを好んだのだから 呪いは彼自身に返るように。祝福することを望まなかったのだから 祝福は彼を遠ざかるように。

(詩編 109 編 17 節)

・この詩編 109 編はすべての詩編の中で、最も非キリスト教的だと言われています。特に 6~19 節の内容の大半を呪いが占めており、とても激しいものとなっています。「呪い」はキリスト教にふさわしくないということなのでしょう。

・というのもイエス様が「だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。(マタイによる福音書 5 章 39 節)」と言われているからです。あなたは復讐をしてはいけません。すべて神さまに任せなさいと言われるのです。

・ただよく考えると、この詩編の作者も自分で手を下そうとはしていません。ただあまりにも具体的に、敵対者やその家族がひどい目に遭うことを願いすぎているから、わたしたちに違和感を与えるのかもしれません。

(10月 3日)「詩編 109 : 20~25」

主よ、わたしの神よ 御名のために、わたしに計らい 恵み深く、慈しみによって わたしを助けてください。

(詩編 109 編 21 節)

・今日の箇所では作者は、「第二の願い」を神さまに対して祈ります。彼は自分を、「貧しく乏しい」と表現します。神さまの前に弱く小さい自分を知り、その上で救いのみ手を差し伸べて欲しいと願うのです。

・当時神さまの祝福は、目に見える形で与えられるものだと考えられていました。裕福で、健康で、家族にも恵まれた人を見て人々は、「神さまに祝福された人」だと思います。しかし逆に貧しく、乏しい人は、「神さまから罰を受けた人」と考えていました。

・詩編の作者は、「わたしは人間の恥」とまで言います。他人から見たらボロボロの状態である自分は、神さまの救いから一番離れた者なのかもしれません。しかしだからこそ、神さまの助けが必要なのです。

(10月 28日)「詩編 119 : 49~56」

傲慢な者はわたしを甚だしく見下しますが わたしはあなたの律法から離れません。

(詩編 119 編 51 節)

・チャールズ・ウェスレーという人物をご存じでしょうか。彼はイングランド国教会における信仰覚醒運動であるメソジスト運動の指導者でした。また数千曲に及ぶ賛美歌の作詞家としても知られています。

・彼が手掛けた曲には、信仰をテーマにしたものが多くあります。その一つが聖歌集 449 番です。「われは堅く 胸にきざむ 守るべきつとめ 身に負えるを」という言葉の中には、「堅固な信仰」というイメージがあります。

・そして 4 節では、このように歌います。「絶えず祈り ただ主にのみ 寄り頼むことを 得させたまえ」。この歌は、詩編 119 編 54~56 編を引用したと考えられています。神さまから離れずに歩むこと、その信仰を持ちたいものです。

(10月 29日)「詩編 119 : 57~64」

御顔が和らぐのを心を尽くして願い求めます。仰せのとおり、わたしを憐れんでください。

(詩編 119 編 58 節)

・作者はここで、「御顔が和らぐのを心を尽くして願い求めます」と書きます。この当時、神さまの顔を見ると死んでしまうと考えられていました。神さまは、とても恐ろしい存在だったということです。

・わたしが子どもの頃、親から神さまは怖いんだよと教えられていたように思います。家には仏壇と神棚が置かれ、神さまの怒りが自分たちに及ばないように、きちんと「おつとめ」をしていました。

・しかし神さまが愛のお方だと知ったときに、わたしの思い描く神さまの表情は、いつも柔らかいものになっていきました。神さまはわたしたちを裁くのではなく、愛されます。イエス様も一緒です。そのことをいつも心に覚えましょう。

(10月 26日)「詩編 119 : 33~40」

御覧ください わたしはあなたの命令を望み続けています。恵みの御業によって 命を得させてください。

(詩編 119 編 40 節)

・ここに出てくる 8 つの節には、すべて「～してください」という願いが込められています。ここでの神さまとの関係は、教師と生徒という形のようにです。生徒は先生に、道を示し、教える理解させてくださいと願います。

・ユダヤ教の指導者を「ラビ」と呼びます。彼らは人々に、正しい道を教えていました。彼らはいつも、過去の人が言ったことを踏襲していきました。例えば「ラビ〇〇はこう言った」という言葉を語ることによって、その内容に権威を与えていました。

・それに対してイエス様は、「わたしはあなたがたにこう言う」と、ご自分の権威で語られました。わたしたちは誰を教師として、誰から学ぶべきでしょうか。誰が示す道を、歩んで行くべきでしょうか。

(10月 27日)「詩編 119 : 41~48」

わたしはあなたの戒めを愛し それに向かって手を高く上げます。わたしはあなたの掟を歌います。

(詩編 119 編 48 節)

・「戒め」という言葉を辞書で引いてみました。「前もって注意すること。また、その言葉。訓戒」と書かれていました。注意をされることが好きな人はいるでしょうか。大抵嫌いなのではないのでしょうか。

・ところが作者は、「わたしはあなたの戒めを愛し」と二度繰り返します。この言葉を聞いたときに、「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない」というイエス様の言葉が心に響きました。

・神さまはわたしたちを縛るために、戒めを与えられたわけではありません。わたしたちが自由に、自分らしく生きていくことができるために、戒めを与えられたのです。そのことを改めて心に留めましょう。

(10月 4日)「詩編 109 : 26~31」

彼らは呪いますが あなたは祝福してください。彼らは反逆し、恥に落とされますが あなたの僕は喜び祝います。(詩編 109 編 28 節)

・26~29 節に、「第三の願い」が語られます。ここでも作者は、敵対者の不幸を願っています。この詩編 109 編は、すべての詩編の中で最も非キリスト教的だと言われていると前回書きました。

・敵対している人がひどい目に遭うと、「ざまあみろ」と思うのでしょうか。それとも「ちょっとかわいそうだな」と思うのでしょうか。旧約の時代には、ひどいことをした人が罰を受けるのは当たり前。だから「ざまあみろ」で済んでいました。

・しかしわたしたち自身も罪人であることを考えると、自分たちもいずれひどい目に遭うことになります。そうすると簡単に、人を呪ってばかりいられないようにも思います。「悲しむ人と共に泣く」ことができればいいですね。

(10月 5日)「詩編 110 編」

あなたの民は進んであなたを迎える 聖なる方の輝きを帯びてあなたの力が現れ 曙の胎から若さの露があなたに降るとき。

(詩編 110 編 3 節)

・「王であり祭司であるメシア」：メシア詩編です。この詩は、王の即位式のように用いられたようです。また教会では、昇天日にも読まれてきました。「イエス・キリストはどこにおられるのか」という問いに答える詩編だからです。

・わたしたちが聖餐式の中で唱えるニケヤ信経には、「主は…三日目によみがえり、天に昇り、父の右に座しておられます」とあります。神さまはイエス様を、メシアや王、祭司として遣わされたのです。

・1 節の言葉は、マタイ 22 : 41~45 を始め、新約聖書の中で引用されています。メルキゼデクとは創世記 14 : 18~20 に出てくる神さまと人々の間をとりなす祭司でした。イエス様は本当の王として、わたしたちに関わって下さるのです。

(10月 6日)「詩編 111 : 1~5」

主の成し遂げられることは栄え輝き 恵みの御業は永遠に続く。

(詩編 111 編 3 節)

・「神の大いなる業」: 個人の賛美をもって導入される賛歌です。この詩編 111 編と次の詩編 112 編とは、一つのもと考えられています。その詩の様式も、使われている言語も対応しているからです。

・「アルファベットによる詩」とは、ヘブライ語のアルファベット 22 文字がそれぞれの行の最初くる形式です。いろは歌やあいいうえお作文のようなものです。教育的な目的でも、このような詩編が用いられていました。

・イスラエルの人たちは、「驚くべき御業を記念するよう定められた (4 節)」ことによって、過越祭、七週祭、仮庵祭といった祭りをおこなうようになりました。そしてわたしたちはイエス様の定められたように、洗礼と聖餐をやっていくのです。

(10月 7日)「詩編 111 : 6~10」

主を畏れることは知恵の初め。これを行う人はすぐれた思慮を得る。主の賛美は永遠に続く。

(詩編 111 編 10 節)

・「主を畏れることは知恵の初め」という言葉があります。こわがる気持ちや恐怖、不安をあらわす「恐れ」ではなく、「畏れ」には敬い、かしこまる気持ちという意味があります。「畏敬の念を抱く」といった使い方もある漢字です。

・この詩編は、主を畏れる人たちによってなされる神さまのみ業への賛美です。神さまはみ業の力を示し、そして諸国の嗣業（神さまによって与えられた土地のこと）を与えられるのです。

・詩編ではその与える相手を、「ご自分の民」と書きます。旧約の時代にはそれはイスラエル民族のことでした。しかしイエス様がわたしたちの贖いとして遣わされた今、「ご自分の民」とはわたしたち一人ひとりでもあるのです。

(10月 24日)「詩編 119 : 17~24」

この地では宿り人にすぎないわたしに あなたの戒めを隠さないでください。

(詩編 119 編 19 節)

・「この地では宿り人にすぎない」と作者は書きます。神さまから見たら、わたしたちの人生はまさに「つかの間」です。またわたしたちは神さまから見たら、本当にちっぽけな存在です。

・しかしそんなわたしたちに、神さまは目を留めてくださるのです。本当であれば罪深いわたしたちには、滅びの道しかなかったのかもしれませんが。しかし神さまはわたしたちにみ言葉を与えてくださるのです。

・聖書のみ言葉は、愛であふれています。ときには厳しく感じる言葉も出てきますが、根底に流れる愛を感じながら読んでいきましょう。そして「あなたの定めはわたしの楽しみです」と心から感謝できるようになれば、本当にうれしいですね。

(10月 25日)「詩編 119 : 25~32」

わたしの魂は塵に着いています。御言葉によって、命を得させてください。

(詩編 119 編 25 節)

・ヘブライ語の 4 番目の文字は「ダレト」です。英語の D に近いのでしょうか。この詩の冒頭に書かれているのは、「わたしの魂は塵に着いています」という言葉です。塵という言葉聞いて思い出すのは何でしょうか。

・日本語のことわざにも、「塵も積もれば山となる」というものがあります。小さなものでも大事にしておけば、山のように大きくなるということでしょう。しかし聖書では、塵はあまり良い意味で用いられません。

・「わたしたちは塵芥(ちりあくた)に過ぎない」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。本来、わたしたちには何の価値もないという意味です。しかしそんなわたしたちに目を向け、歩ませて下さる方を、わたしたちは知っているのです。

(10月 22日)「詩編 119 : 1~8」

いかに幸いなことでしょう 主の定めを守り 心を尽くしてそれを尋ね求める人は。
(詩編 119 編 2 節)

・「神の教えは命の源」：教育的な詩編です。この詩はヘブライ語のアルファベット 22 文字の頭文字からスタートした 8 節ごとに区切られます。全部で 176 編あるこの詩は、詩編の中で最も長いものです。

・この詩を通して主に従って歩んで行くことを、学んでいくのです。「主に従い行くは いかに喜ばしき 心の空晴れて 光は照るよ み跡を踏みつつ 共に進まん み跡を踏みつつ 歌いて進まん」という聖歌があります。

・「従う」というと、わたしたちはあまり良いイメージを抱きません。渋々ついていくという印象を持つ人もおられるでしょう。先ほどの聖歌は 457 番ですが、身体が飛び跳ねるようなメロディーです。そのような気持ちで、神さまについていきたいものです。

(10月 23日)「詩編 119 : 9~16」

どのようにして、若者は 歩む道を清めるべきでしょうか。あなたの御言葉どおりに道を保つことです。

(詩編 119 編 9 節)

・「教会に来る若者が少なくなった」とよく聞きます。実際にはおられるのですが、いわゆる団塊の世代の方々が若かったころに比べると、確かに若者の比率は随分減ったように思います。心は若いという方は多いですが。

・若い世代に、どうやって信仰を伝えていったらよいか、これは永遠の課題のようです。聖書が書かれた時にもすでに、若者に対してどう伝えるべきかが議論されていました。例えば過越の出来事を、家長は毎年子どもたちに伝えなさいなど。

・昔のように娯楽が少なく、西洋の宗教や語学・音楽が珍しかった時代と違い、今は教会に魅力がないとあきらめてはいないのでしょうか。神さまがわたしたちにどう関わってくださるのか、正面から伝えるのも必要なことだと思います。

(10月 8日)「詩編 112 : 1~4」

ハレルヤ。いかに幸いなことか 主を畏れる人 主の戒めを深く愛する人は。
(詩編 112 編 1 節)

・「義人の豊かな恵み」：111 編に続く賛歌です。主を畏れる人のあり方を称賛し、その生き方を「いろは歌」で書き記します。聖歌集の「希望」というカテゴリーに、「暗闇行くときには (聖歌 476 番)」という歌があります。

・「暗闇行くときには 主イエスが示された 輝く星をもとめ 光に顔むけよう 光は闇を照らし 昼は夜をつつむ とりまく影をぬぐいて 光を仰ぎ見よう」。東日本大震災のあと東北の地を訪れこの歌を聞いたときに、涙があふれた記憶があります。

・神さまを畏れ、神さまの前にまっすぐでいたいと願う人の元に、必ず光は昇ります。どんなに暗闇が深くても、明けない夜はありません。神さまが必ず、救いの火を灯してくださる。そのことをいつも信じていたいと思います。

(10月 9日)「詩編 112 : 5~10」

主に従う人はとこしえに揺らぐことがない。彼はとこしえに記憶される。

(詩編 112 編 6 節)

・6 節に「とこしえに」という言葉が二度でできます。とこしえとは漢字では永久が使われ、「ながく変わらないさま、永久不変であるさま、いつまでも同じ状態で続くさま」だと辞書には書かれていました。

・聖公会の礼拝では詩編などの後に、「栄光は 父と子と聖霊に 初めのうちに、今も 世々に限りなく アーメン」という唱和を唱えることがあります。初めも、今も、そしてこれからも同じように、という意味でしょう。

・神さまを畏れる人に与えられる平安は、これからもずっと約束されているということを、この詩編では唱えているようです。神さまの前にへりくだり、神さまにのみ救いを求めることは、それほど大切なことなのです。

(10月 10日)「詩編 113 編」

日の昇るところから日の沈むところまで 主の御名が賛美されるように。

(詩編 113 編 3 節)

・「いと高き主の慈愛」：賛歌です。この 113 編から 118 編は、ハレルと呼ばれる詩編歌集です。これらは特に出エジプト記の出来事について書かれているので、「エジプトのハレル」と呼ばれることもあります。

・この詩編は特に、過越祭の際に歌われたと言われます。「ハレル」とは「たたえる」という意味で、神さまが働かれるときに何が起こるのか述べながら、神さまを賛美します。7～9 節が、神さまがなさることです。

・「弱い者」、「乏しい者」、「子のない女」を引き上げるという記述は、ハンナの祈り（サムエル記上 2：1～）やマリアの賛歌（ルカ 1：46～）を思い起こします。イエス様のナザレでの最初の説教（ルカ 4：18～19）も、同じような視点で語られています。

(10月 11日)「詩編 114 編」

山々よ、雄羊のように 丘よ、群れの羊のように踊るとは。

(詩編 114 編 6 節)

・「エジプト脱出の時の主の業」：ハレル詩編の第 2 のものになります。この詩編はイスラエルの定礎詩編と呼ばれ、神さまがどのようにしてイスラエルにとって聖なる方となられたのかが語られます。

・1～2 節ではイスラエルがエジプトを出て、ユダが聖所（神の聖なるもの）となった様子が書かれます。そのことによって、海や山々、丘が震撼する様子も伝えられます。その描写は「雄羊のように、群れの羊のように踊る」と描かれます。

・羊が躍る場面をあまり見たことはありません。聖書では人間と神さまの関係を、羊と羊飼いの関係にたとえることがあります。神さまがイスラエルの民に希望を与えられたので、民は大いに喜び踊った。そういうことを言っているのでしょうか。

(10月 20日)「詩編 118：10～18」

蜂のようにわたしを包囲するが 茨が燃えるように彼らは燃え尽きる。主の御名によってわたしは必ず彼らを滅ぼす。

(詩編 118 編 12 節)

・10～12 節には、「主の御名によって」という言葉が繰り返されています。ただこの言葉が正しく使われていればいいのですが、そうではない場面もたびたび見受けられます。十字軍などもそうでしょう。

・「主の御名によって」と言えば、自分が神さまになり代われると思ったら大間違いです。神さまのみ心を、わたしたち人間が完全に理解することなどできるのでしょうか。神さまの名前を使って人を裁くなど、もつてのほかなのです。

・わたしたちはただただ、神さまのみ救いを喜ぶ者でありたいと思います。「主こそまことの救い 永遠の喜び わが力わが歌 主のみを信じて 決して恐れない（聖歌 570 番）」と歌い続けましょう。

(10月 21日)「詩編 118：19～29」

主こそ神、わたしたちに光をお与えになる方。祭壇の角のところまで 祭りのいけにえを綱でひいて行け。

(詩編 118 編 27 節)

・聖歌 391 番の 1 節は、このような歌詞です。「いともとうとき 主はあもりて 血の値もて 民を救い 聖き住まいを 造りたてて そのいしずえとなりたまいき」。とても静かな、心に残る曲です。

・22～23 節にある「家を建てる者の退けた石が隅の親石となった。これは主の御業わたしたちの目には驚くべきこと」という言葉は、ペトロの手紙一 2 章 4 節でも引用されています。詩編では、他から捨てられたイスラエルが世界の中心となるという意味です。

・しかし神さまは、イエス様をわたしたちのための隅の親石として遣わされます。人々から見棄てられ、十字架につけられたイエス様は、その血によってわたしたちのための住まいを建てられたのです。そのことを喜び、ハレルヤ！と賛美しましょう。

(10月18日)「詩編117編」

すべての国よ、主を賛美せよ。すべての民よ、主をほめたたえよ。

(詩編117編1節)

・「世界よ、主をたたえよ」：ハレル詩編です。この詩編は2節しかなく、最も短いものとなっています。しかし日本聖公会聖歌集には、311番、478番、565番という3曲の歌詞の元になっています。

・311番「あまつみ使いよ」の5節、「よろずの民らよ み前に伏し 栄のみ神を 主とあがめよ 主とあがめよ」、478番「聞けや愛の言葉を もろくに 人らの 罪とがを除く 主のみ言葉を 主のみ言葉を やがて時は来たらん 神のみ光の あまねく世を照らす あしたは来たらん」。

・どちらもとても元気になる曲です。そして565番はテゼ共同体で歌われる歌です。「すべての人よ 主をたたえよ」と何度も繰り返すこの歌は、わたしたちに神さまへの賛美を思い起こさせます。

(10月19日)「詩編118：1～9」

主はわたしの味方、わたしは誰を恐れよう。人間がわたしに何をなしえよう。

(詩編118編6節)

・「感謝の行列の歌」：個人の感謝の歌です。当時ユダヤの人が神殿で感謝の献げ物をささげるとき、神殿の入り口から列を作って行進したそうです。その中で1～4節の交互唱歌が用いられたのだと思われます。

・聖公会の礼拝では、司式者と会衆が交互に唱える場面が多く見られます。たとえばお葬式に初めて出席された方は最初こそ戸惑うようですが、「何をしているのかがよく分かった」という感想をいただくことも多くあります。

・そして後半では、神さまに頼ることと人に頼ることを比較していきます。ここでは「人間」と書かれていますが、お金や名誉、プライドなどと置き換えてもいいでしょう。わたしは何に頼るのか、誰を避けどころとするのか、とても大切なことです。

(10月12日)「詩編115：1～8」

国々の偶像は金銀にすぎず 人間の手が造ったもの。

(詩編115編4節)

・「まことの神、主に対する信頼と賛美」：異教の神々を信仰する人々に取り囲まれた会衆のための詩です。旧約聖書では「偶像」を忌み嫌います。十戒の中にも、「あなたは自分のために、偶像を造ってはならない」という戒めがあります。

・4～8節では、偶像は所詮人間の造ったものであるから、何もできない。だから神さまにのみ寄り頼みなさいと命じます。そうではなくあなたがたの神に願い、嘆き、そして信頼しなさいと促すのです。

・聖歌557番は頌栄としてよく用いられます。「父 み子 聖霊 ひとつの神ときわにたえせず み栄えあれ み栄えあれ アーメン」。わたしが学生の時は「父み子みたまのおおみかみに～」でしたが、神さまを賛美し、神さまに信頼を置くことが大切なのです。

(10月13日)「詩編115：9～13」

主を畏れる人よ、主に依り頼め。主は助け、主は盾。

(詩編115編11節)

・9節から11節で、作者は「主は助け、主は盾」と三回繰り返します。この詩編は異教徒に囲まれた状況の中で読まれていました。その人たちの悪いおこないや偶像崇拜などが自分たちの中に入り込まないように、神さま、盾になってくださいということでしょう。

・ただこの考え方をそのまま引き継いでしまうと、神社の鳥居は決してくぐらない、仏壇なんてとんでもない、ひな人形なんて燃やしてしまえ！という過激な思想にもつながりそうです。(実際、そういう方たちに会ったことがあります)。

・周りにいる自分とは考え方の違う人たちを“悪”と決めつけずに、自分と同じように救いを求める“仲間”だと考えることができればと思います。自分自身の悪い心に身体が犯されていかにないように、盾として守ってもらう。そして祝福を願うのです。

(10月14日)「詩編115:14~18」

わたしたちこそ、主をたたえよう 今も、そしてとこしえに。ハレルヤ。
(詩編115編18節)

- ・この詩編115編は、礼拝式文として用いられてきました。礼拝の中でわたしたちは、主をほめたたえます。この詩編でも18節で、「わたしたちこそ、主をたたえよう 今も、そしてとこしえに。ハレルヤ」と歌います。
- ・日本聖公会聖歌集の中には、「頌栄」というカテゴリーがあります。頌栄とは、「神の栄光をほめたたえよ」という意味です。「栄光あれ」ということですが、ラテン語では「グローリア」という言葉になります。
- ・聖歌560番を歌ったことはあるでしょうか。「グローリア グローリア グローリア 父とみ子に グローリア グローリア グローリア 聖なる霊に」という簡単なフレーズの繰り返しです。歌いながら神さまが下さったたくさんの恵みを思い起こす。そして栄光を主に帰すのです。

(10月15日)「詩編116:1~7」

哀れな人を守ってくださる主は 弱り果てたわたしを救ってくださる。
(詩編116編6節)

- ・「救いの感謝」：個人的感謝の歌です。救いを求める祈りが聞かれたことに對して、感謝をささげます。1節に、いきなり「わたしは主を愛する」という言葉が出てきます。この詩は、神さまへの愛の告白からスタートするのです。
- ・「主われを愛す」という歌は良く知られていますが、こちらから神さまを愛するということを歌った歌があるのをご存じでしょうか。聖歌集の533番にあります。この聖歌集にたくさんの歌が収められているジョン・ベルが作詞・作曲したものです。
- ・「主を愛そうこころこめて 深い思いを見つめ 主に愛されて生かされるこの命を尽くして 見つけようまことのやさしさを いくつしみあふれるイエスの中に 主を愛そうこころこめて 深い思いを見つめ」。歌詞を見ただけで、温かい気持ちになりませんか。

(10月16日)「詩編116:8~14」

主はわたしに報いてくださった。わたしはどのように答えようか。
(詩編116編12節)

- ・この詩編は、個人が「感謝の献げ物」をしたときに歌われたそうです。旧約聖書のレビ記を見ると、どのようなときにどのような献げ物をするべきかが、細かく決められていました。
- ・イエス様がお生まれになったときも、マリアとヨセフは神殿に行き、山鳩一つがい、家鳩の雛二羽をいけにえとして献げました。しかしわたしたちは、赤ちゃんが生まれても教会に鳩を持ってきたりはしません。そのようないけにえはもう必要ないのです。
- ・ではわたしたちは、どのように神さまの恵みに応えるべきなのでしょう。神さまに何を返すのでしょうか。奉獻のときに「すべてのものは主の賜物、わたしたちは主から受けて主にささげたのです」と唱えるたびに、そのことを思います。

(10月17日)「詩編116:15~19」

どうか主よ、わたしの綱目を解いてください。わたしはあなたの僕。わたしはあなたの僕、母もあなたに仕える者。
(詩編116編16節)

- ・この詩編はもともと、個人的な感謝の歌でした。どのような個人的祈りが聞かれたのかは、ここには書かれていません。しかしだからこそ、わたしたちはこれらの言葉に共感をし、祈りの言葉に合わせて歌うことができるのかもしれません。
- ・今日の詩編の言葉は、降臨節の聖歌の歌詞にも反映されています。降臨節とはクリスマスの前、イエス様のご降誕を待ち望む紫の期節です。カトリック教会では待降節と呼びます。暗闇の中、光がやって来るのを待ちわびるのです。
- ・「あの人の祈りが聞かれたのだから、わたしの声も聞いてくださるに違いない」。人々はそこに希望を置きました。そしてこの詩編は共同体の喜びの歌となっていくのです。わたしたちも周りの人の「救いの体験」を聞きながら、感謝の歌を歌えたらと思います。